「僕たちが何者でもなかった頃の話をしよう」



著者：山中 伸弥　羽生 善治　是枝 裕和
**　　山極 壽一　永田 和宏**
出版：株式会社　文藝春秋
発行：2017年 2 月20日

先日、京都大学 iPS 細胞研究所所長の山中伸弥教授の講演を聴く機会を得た。2012年にノーベル生理学・医学賞を受賞された高名な方の講演なので、さぞ難解なお話をされるのかと思っていたが、実際の山中先生はとても気さくな人柄で、冗談を交えたり、答えのないクイズを出されたりと、ユーモアたっぷりなお話に引き込まれた。しかし、伝えるべき内容は明快で、iPS 細胞の目指す「再生医療」と「薬の開発」の現状と課題について、たいへん理解を深めることができた。本書は、その山中教授をはじめとする各界の著名人の講演と対談という形式で構成されている。

第 1 章　山中　伸弥　「失敗しても、夢中になれることを追いかけて」

1962年生まれ。山中教授もはじめから順風満帆であったわけではなく、iPS 細胞と出会うまでは数々の挫折と失敗を味わってこられた。「二十歳前後の 5 年間というのは、何にも代えられない宝物みたいな時間である。この時間に何をやったら正解というのは全くない。でも何もしないことは本当にもったいのである。学生時代にやった失敗は絶対に無駄にならない。」

第 2 章　羽生　善治　「挑戦する勇気」

1970年生まれ。将棋棋士。2017年12月、史上初の永世 7 冠を達成。「人間は誰でもミスをするものである。挑戦して行く時に大切なのは、ミスをしないこと以上に、ミスをした後にミスを重ねて傷を深くしない、挽回できない状況にしないことである。」

第3章　是枝　裕和　「映画を撮りながら考えたこと」

1962年生まれ。映画監督。2013年、「そして父になる」がカンヌ国際映画祭審査員賞受賞。当初はテレビ局に入社し、ディレクターとなって、「予想と違う現実が起きたときに、そこに本当のドキュメントが生まれるということに気づいた。先入観が崩れるとき、新しい世界を発見することができる。」

第4章　山極　壽一　「挫折から次のステップが開ける」

1952年生まれ。京都大学総長。1978年よりアフリカ各地でゴリラの野外研究に従事する日本の霊長類研究の第一人者。少年時代は、児童文学「ドリトル先生シリーズ」のドリトル先生にあこがれて、アフリカに行って動物たちと話がしたいと考えていた。「挫折により新しい目を開くことができた。」

現代の若者にとって、偉人と呼ばれる人たちは、自分たちとは縁のない別世界の人としてしか受け止められておらず、誰かにあこがれるという対象も持っていないことが多いといわれる。しかし、本書では、彼らも若い頃は、自分と同じ失敗や挫折を経験してきて、将来への不安や焦りも同じようにあったのかということを感じ取ることができる。そして、彼らも若い頃は、自分とあまり変わらなかったのだと実感したら、次にはとりあえず「一歩を踏み出す」ことが大切になる。最初から不可能だと思ってしまわないで、「ひょっとしたら」と思えることは、一歩を踏み出すモチベーションにも、勇気にもつながるはずである。

起業教育研究会 企画委員
奈良県立五條高等学校
進路指導部長／商業科長　谷口達之輔